

英語で教える秘訣

中 井 俊 樹

名古屋大学高等教育研究センター

司会者：それでは一通り人がそろったような感じがいたしますので、第16回教育研究推進室のワークショップを開催させていただきたいと思います。これは今年度の最初のFDと位置付けたいと思います。今日は「英語で教える秘訣」という内容ですけれども、名古屋大学の高等教育研究センターの中井先生にお越しいただいてお話をいただくことになっています。英語で教える秘訣というと、わたしたちにとってはあまり関係ないような感じがいたしますけれども、大きな

背景といたしましてはみなさんもよくご存じだと思うのですが、「留学生30万人計画」というのが下りておりまして、そういった大きな背景の中で、英語で授業をし、英語で学位を取らせるという方向に展開していくということも考えられますけれども、今日はそういったちょっと恐ろしいような話は隅のほうに置いておいて、今年最初の話題提供という感じで開くというように聞いていただければと思います。それでは中井先生、どうぞよろしくお願いいたします。

中井：こんにちは。高等教育研究センターの中井です。どうぞよろしくお願いいたします。まず、今年初めてのFDワークショップの話題提供者として声をかけていただきどうもありがとうございます。また、お忙しいところお集まりくださり、どうもありがとうございます。

今回、「英語で教える秘訣」に関しての話題提供を依頼されましたが、しばらく悩みました。もしわたしがここで、ひとりずつ当てて発音をチェックするようなスキル研修をやったら多くの人は引いてしまうのではないかと思います。また、次期の中期目標・中期計画を念頭に、英語による授業を研究科としてどのように位置付けるのかという課題はあると思います。しかし、これもまだ考える時間が残されています。ですので、今回は次のように話題提供の目的を設定しました。大学において英語による授業が推奨されるが、文学研究科として、また個々の教員としてどのように対応したらよいのかについて考えるための素材を提供したいということです。

今日は4つの内容についてお話ししたいと思います。初めに、英語による授業に対するみなさんの意識を調査したいと思います。次に、英語による授業の推進にかかわる学内外の動向を紹介したいと思います。そして、2008年3月に高等教育研究センターで作成した『英語で教える秘訣』についてお話ししたいと思います。最後に英語による授業についてはさまざまな

論点が含まれます。その論点を整理して、みなさんが今後議論しやすいようにできればと考えています。

クリッカーを利用した意識調査

それでは、意識調査から始めます。そのためにリモコンみたいなものを用意しました。最近、いくつかの大学で導入されているクリッカーと呼ばれているものです。みなさん、一部ずつありますか？ みなさんに配布されたリモコンのような装置は、クリッカーと呼ばれています。1, 2, 3……と番号のボタンがありますね。番号のボタンを押したら、こちらの受信機を通して、その投票結果がパソコン上に表されます。では、やってみましょうか。これまでクリッカーの実物



を触ったことがあるという方は1を押してください。ないという方は2を押してください。こちらのほうを向いて押していただけるといいかなと思います。13名、全員が「いいえ」ですね。みなさんにとってこの機器は初めてのものだということですね。このクリッカーは、北海道大学、東京大学、早稲田大学で導入されています。名古屋大学では高等教育研究センターしか持っていないと思います。アメリカの大学ではよく使われているようです。

次にいきましょう。これまでに学生として英語による授業を受講したことがありますか？ 海外の大学を含めて学生として英語による授業、つまり英語を使用言語として行われた授業を受講したことがありますか。「はい」を1で、「いいえ」を2でお願いします。(男性発言：複数回、押しても大丈夫ですか？) 複数回押したら、後の方の回答が反映されます。よろしいでしょうか？ 「はい」が64%、約3分の2の先生方は英語による授業を受講したことがあるということですね。

次にいきましょう。これまで教員として英語による授業を担当したことがありますか？ おっと、反応が早くなりました。慣れてきましたね。よろしいでしょうか。29%が経験しているということですね。

次にいきましょう。現在、授業で英語の教科書や教材を使用していますか？ よろしいですか。これを見ますと頻繁に使用しているという方が約7割いらっしゃるということです。時々使用しているが15%、ほとんど使用していない方が15%で、全く使用していない方はいらっしゃる。もちろんここにいらっしゃる方は、このセミナーの題目で参加された方ですので、多少バイアスがかかっていると思います。

次にいきましょう。名古屋大学の学生は卒業したら仕事で英語がつかえる水準まで英語運用能力を向上させるべきでしょうか？ 「そう思う」、「少し思う」、「あまり思わない」、「全く思わない」の4択でお願いします。「そう思う」が21%、「少し思う」が50%、「あまり思わない」が29%、「全く思わない」という方はいらっしゃるという結果でした。卒業したら仕事で英語をつかえる水準まで英語運用能力を向上させるべきかと聞いたのには理由があります。現在、文部科学省は英語が使える日本人という目標に向けてさまざまな政策を出しています。高校卒業段階では、英語でコミュニケーションできる。大学卒業段階では、仕事で英語が使える。これらが国によって期待されている学習成果の基準となります。

次にいきましょう。今後名古屋大学は留学生数を増やすべきでしょうか？ 参考までに名古屋大学に学生は約15,000人いて、その中の約1,200名が留学生です。文学研究科では96名の留学生がいるようです。「そう思う」という方が30%程度います。「少し思う」という方が50%います。「あまり思わない」という人は20%程度です。

次にいきましょう。今後、名古屋大学は英語による授業を増やすべきでしょうか？ 増やしたほうがいいのか、それとも増やす必要はないのか。「そう思う」という方が7%。「少し思う」は14%。大部分の方は英語による授業を増やすべきだとあまり思わない、もしくは全く思わないということですね。

次にいきましょう。英語だけが世界中に拡大し、英語運用能力が高い者が有利になる状況を本当は快く思っていないでしょうか。こういう質問はクリッカーならではのと思っています。誰が押したのかわかりませんから、気軽に押していただければと思います。以前、名古屋大学にいらっしゃった津田先生は英語帝国主義という言葉で批判していました。いかがでしょうか。結果はおもしろいですね。快く思っていないという方が半分いらっしゃいます。少し快く思っていないという方は43%で、全く不快を感じていない方は1人しかいらっしゃらないですね。英語だけが世界中に拡大していくことに関しては、抵抗がある方が大部分ということがわかりました。

次にいきましょうか。今度はみなさん自身に関わる設問です。自分が英語による授業を頼まれたら快諾できると思いますか。「そう思う」という方は1名ですか。「全く思わない」という方は4割近くいらっしゃるとのことです。「あまり思わない」と合わせると、約80%の方は快諾できないということですね。

次にいきましょう。最後の設問です。既にアメリカではクリッカーが700万個以上出荷されています。実際に体験して自分でも使用してみたいと思いますか？ これは授業用につくられたものなのですが、もしかしたら教授会とか別の用途にも使えるかもしれません。そう思う方がかなりいらっしゃいますね。約4分の3です。少し思うが8%、全く思わない方も17%いらっしゃいます。クリッカーをテーマにFDをしてもよかったかもわからないですね。高等教育研究センターではクリッカーの貸し出しサービスもしていますので、もし関心のある方がいらっしゃいましたら、ご連絡いただければと思います。

英語による授業に関わる動向

次に、英語による授業にかかわる最近の動向を簡単に説明したいと思います。まず紹介したいのは教育再生会議です。これは安倍内閣のときにできた会議で、座長はみなさんもお存じの野依先生です。教育再生会議が2008年1月に最終報告書を出しました。その中で、英語による授業の大幅増加、具体的にはすべての授業の中の30%を英語で開講すべきであるということが書かれました。福田内閣に代わって、教育再生会議の後継となった教育再生懇談会の報告書も同様です。「留学生30万人計画」を国家戦略として取り込む、そのために大学全体で3割の英語授業を目指すということが掲げられました。また、中央教育審議会大学分科会の留学生特別委員会の資料の中でも、英語のみでも学位が取れるコースの大幅な増大が必要になると書かれています。世界最高水準の卓越した教育研究拠点を目指す大学院が、世界の大学と競い、優秀な留学生を獲得するために、英語のみで学位が取れることが重要であるということも指摘されています。このように政策的には英語による授業を大幅に増やそうという圧力が、今後大学にかかってくるのが予想されます。

これは日本だけの動向ではないようです。学術振興会が韓国の大学を調査した報告書があります。そこでは、多くの大学が教員採用において、英語で授業ができることを資格要件としてしていると報告しています。ソウル大学では、英語による授業の増加を全授業の20%まで高めることを目標にしています。高麗大学は、2001年に10%であった英語による授業が、現在35%まで増加しています。別の全国調査を行った資料によりますと、現在で学部教育の14%が英語で行われていて、大学院教育は19%が英語で行われているようです。韓国の場合、日本よりも授業の英語化に関しては先に進んでいることがわかるのではないかと思います。

一方、日本の大学の状況も随分変わってきました。これは文部科学省のホームページ上から入手したデータですが、英語による授業の実施状況を示したものです。多くの大学で英語による授業が実施されつつあります。国立大学では65校で英語による授業が実施されています。8割近くの国立大学において英語による授業が実施されているということです。名古屋大学も実施していると答えているはずですが。このような調査の怖さは、毎年継続しているということです。毎年同じ質問を聞かれると、やらないとまずいのではと大学

は思うのではないのでしょうか。英語による授業のみで卒業できる大学のリストも文部科学省で公開しております。学部はそれほど多くはないのですが、大学院教育では多くの大学において進められております。大学院では機関数で57、研究科数で101が英語のみで修了できます。

一例として、熊本大学の例を取り上げてみたいと思います。熊本大学の自然科学研究科は大学院科学技術教育の全面英語計画プロジェクトをもっており、期間内に英語化を進めています。この事例がおもしろいのは、段階的な進捗を考えているということです。カテゴリー0というのは、教科書も使用言語も日本語で行う授業です。カテゴリー1の段階になると、教科書・資料を英語にして、使用言語を日本語にする。カテゴリー2は、教科書・資料は英語で、使用言語は日本語プラス英語になる。カテゴリー3では、教科書・資料も使用言語もすべて英語にする。このように4つのカテゴリーをつくって英語化を段階的に進めています。

今まで他大学のことをお話ししたのですが、名古屋大学も中期計画において学部および大学院での英語による教育プログラムを開講する、またその受講者数を増加させることを公表しています。平成18年度の実績報告書によると、全学で155コマ開講されているようです。

世界の研究大学は、タイムズ誌の世界の大学ランキングに影響を受けています。去年、名古屋大学は112位と評価されました。その内訳を見ると、一番点数の低い指標が国際化指標です。どれほど留学生がいるのか、またどれほど外国人教員がいるのかに関わる指標です。多くの日本の国立大学に共通しているのですが、国際化指標が低いことによってランクを下げているという現状があります。また、ピア・レビューのスコアも少し低いです。これも実は大学の国際性と関係があります。国際的に流動性が高い大学ほどピア・レビューのスコアが上がるといわれています。これらを考えますと、日本の大学は国際競争力を高めるためにも、海外の教員や学生を集めて、名古屋大学のブランド、評判を上げていくという戦略を主張する人が多いのも理解できるのではないのでしょうか。

みなさんの関心があるのは、文学研究科の中期計画だと思います。文学研究科の中期目標・中期計画には、英語による授業を開講するという項目がありました。ご存じだったのでしょうか？ 検証のための指標としては開講数と受講者数があげられています。2004年からの6年間で中期目標期間として、その中では次

表 文学研究科の年度計画と実施状況

年度	年度計画	実施状況
2004年度	<ul style="list-style-type: none"> どのような授業を英語で実施するのがふさわしいかについて検討する。 英語授業実施につき、どのような支援が必要か調査する。 	<ul style="list-style-type: none"> 留学生、日本人学生それぞれについて、英語で授業を行うことの是非を検討した。 英語による授業担当者から必要な支援策について聴取した。 英語による授業を15コマ実施した。
2005年度	<ul style="list-style-type: none"> 検討結果に基づき、英語による授業を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語による授業を9コマ実施した。 英語による授業を担当している教員から、授業の問題点について聴取した。
2006年度	<ul style="list-style-type: none"> 現在英語で授業を行っている教員に、継続して同様の形式の授業を実施してもらう。 学生のニーズに応じた授業形態について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語による授業を学部9コマ、大学院6コマ開講した。 英語を母語とする助教採用した。 英語による授業に対するニーズを受講者アンケートによって調査した。 大学院教育の高度化を図るため、「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採用されたプロジェクトで、英語による授業を含むカリキュラムを編成した。
2007年度	<ul style="list-style-type: none"> 現在英語による授業を開講している教員を中心に、引き続き英語による授業を開講する。 「魅力ある大学院教育」イニシアティブのプロジェクトのために編成したカリキュラムに基づいて授業を実施し、問題点があれば次年度に向けて改善を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語による授業を学部10コマ、大学院8コマ開講した。 英語による授業としてどのような科目がふさわしいのか、学務委員会で検討した。 フィールドワーカー養成プログラムのカリキュラムに基づき、英語による授業を実施した。
2008年度	<ul style="list-style-type: none"> 現在英語による授業を開講している教員を中心に、引き続き英語による授業を開講する。 「魅力ある大学院教育」イニシアティブのプロジェクトのために編成したカリキュラムに基づいて実施された授業の結果をもとに、問題点を整理・検討する。 	

のように書かれています。2004年度は、どのような授業を英語で実施するのがふさわしいかを検討・調査するという計画を立て、実際に検討し、支援策について担当者より聴取し、英語による授業も15コマ実施しています。2005年度は、調査結果に基づき授業を実施するというので、授業を9コマ実施している。ここで減少します。名古屋大学の全学の計画では増加させるという目標だったのですが、文学研究科の場合は増加させるのではなく開講すると書かれているので問題ないのかもしれませんが。2006年になると、継続して実施し、学生のニーズに応じて授業形態について検討し、学部9コマ大学院6コマを開講しました。英語を母語とする助教採用し、ニーズを調査しました。また「魅力ある大学院教育」イニシアティブに英語による授業を組み込んだというのが実施状況になっています。昨年度は引き続き授業を開講し、「魅力ある大学院教育」イニシアティブにおいて英語による授業を実施して問題点を明らかにするという計画がありました。実施状況を見ると学部10コマ大学院8コマ

でした。また、学務委員会でどのような科目がふさわしいかを検討しました。今年度は、引き続き授業を開講して「魅力ある大学院教育」イニシアティブにおける英語の授業の実施と、その問題点を整理・検討することが計画されています。

『英語で教える秘訣』という冊子

今回みなさんに紹介したいのは、『英語で教える秘訣』という冊子です。これは2008年3月にいくつかの学内部局の先生方と一緒につくったものです。そもそもどうしてこのような冊子をつくったのかという経緯をまずは紹介します。高等教育研究センターでは授業に関する相談サービスを行っています。特に新任教員研修などの機会に、困ったらいつでも高等教育研究センターに来てくださいと広報しています。すると何名かの若手教員が相談に来ます。その中の2人が同じテーマでした。1人の相談は来学期から英語による授業を担当するので、英語で教えるポイントや秘訣を教

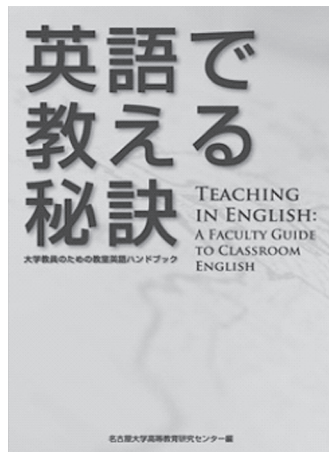


図 『英語で教える秘訣』

えてほしいという相談でした。もう1人の相談は、採用面接で英語による模擬授業を求められたので、アドバイスがほしいという相談でした。わたし自身も何人かのアジアからの研修生に対して英語でセミナーを行うという機会があったのですが、実際にやってみてうまくいかないことが多かったです。英語を話すと人格まで少し陽気になるのが恥ずかしく、平静に話せたらいいなと感じていました。ですので、英語で教えるノウハウをまとめる価値があるのではと考えました。

いろいろと文献を読んで調べると、授業における英語は難しいということがあらためてわかりました。その理由のひとつは、教室で使用する言葉は特殊だからです。慣れていないと、とっさに出ないのです。教室で使用する英語は Classroom English, 日本語では教室英語といわれています。「前の方に詰めてください」、「出席をとります」、「3人のグループをつくってください」、「課題はタイプして、ホチキスでとじてください」、「解答用紙を裏にして、後ろから前に順に送ってください」などは、なかなか日常生活では使わないフレーズです。

この冊子をつくるプロセスでは、次の3つのコンセプトを大事にしました。1つ目は、役に立つノウハウと英語表現を、簡潔なカタチで広く共有するということです。2つ目は、大学教員を対象としたものにするということです。これまで、大学教員を対象とした英語で教えるためのハンドブックはありませんでした。一方、小学校教員に対してのハンドブックはかなりの蓄積がありました。現在、小学校に英語を導入しようと、総合的な学習の時間などで英語の授業が始まっています。しかし、小学校教員を対象としたハンドブックの内容では大学教員には不十分です。3つ目のコン

セプトは、英語力の向上のみで問題解決を図らないということです。インストラクショナル・デザインなどの教授法の知見を活用したほうがよいと考えました。この冊子をつくったときに、新任教員や大学院生にとっては、日本語の部分だけでも役に立つのではないかと思います。彼らにとっては日本語の教室英語も新しいものだからです。

英語で授業をする時の方針は5つにまとめました。1つ目は完璧な英語を目指さないということです。今、英語は World Englishes といわれています。Englishes というのは複数形です。世界ではさまざまな英語が存在します。そもそも完璧な英語は目指そうと思っても、ひとつの完璧な英語自体が存在しないためナンセンスと言えます。日本人の英語も特色ある World Englishes の1つだと思って、気軽に英語を使いましょうということを、1つ目の方針としてあげました。2つ目はコースの全体図をしっかりと設計することです。これはFDにおいても重視してきた概念です。一回一回の授業、セッションと冊子では書きましたが、セッションを計画することも大事だけど、広く15回の授業全体のコースをきちんと設計することのほうが大事だということを指摘しました。コースデザインを意識することによって英語による授業も少し楽になります。3つ目は、コミュニケーションの手段を増やすということです。さまざまな先生に聞き取り調査をすると、パワーポイントがあれば何とかなるという先生が多くいます。さまざまな方法でコミュニケーションの手段を増やせば英語による授業に対応できます。4つ目は、授業での学生の参加を促すということです。聞いているだけでは学生にとってももったいないことです。せっかく英語で学んでいるのであれば、学生の参加も促したほうが教員にとってもやりやすくなります。最後は、学生の英語力の多様性に配慮しましょうということです。

「場面別の秘訣と英語表現」の部分がこのハンドブックの本体になります。いろんな教員から聞き取りをすると、多数のノウハウやフレーズが出てきます。それをどうやってまとめたらいのかということで、われわれなりにまとめたのが、この本の章立てになります。場面を教授法の分類で30に分けました。初回の授業ですべきこととして、初回の授業を始める、授業の雰囲気を和ませる、授業の概要を説明する、授業のルールをつくる、教室内の英語の方針を伝える、といった分類になります。

具体的に、ページの構成を見てみましょう。16ペ

ージと17ページに、「初回の授業を始める」がまとめられています。その中には、「みなさん、わたしの声が聞こえていますか？」といったフレーズが10個あります。内気な日本の大学教員でも言いやすいフレーズを集めたつもりです。このページには、コラムもあります。これは実際に英語で授業をやってみて、うまくいったことや失敗したことをまとめたものです。「初回の授業を始める」の場面では、国際開発研究科の北村先生によるコラムです。UCLAでの留学経験から、「ファーストネームで呼んでください」と学生に言ったところ、誰もが遠慮して先生の名前を呼べなくなったという経験談です。また、冊子にはシラバスの書き方の例、学生用の英語表現リスト、授業アンケート、用語集などもまとめています。

また、英語で授業を実践している映像を取めたDVDもつくりました。貸し出しサービスも行っています。現在、大体15件ぐらい学内教員に貸し出し中です。関心のある方は借りていただければと思います。

3月に『英語で教える秘訣』をつくった後に、学内の周知を図るため、ニューズレターで「本書をご希望の方はお送りしますのでご連絡ください」という記事を入れました。学内からの依頼状況ですが、一番多かった部局は医学研究科でした。工学研究科や法学研究科も多かったです。文学研究科からも5名の方から依頼がありました。ニューズレターで紹介しただけですが、学内で197件の依頼がありました。全体の10%強のニーズがあったということはわれわれもうれしかったです。

『英語で教える秘訣』の開発によって明らかにされたことをまとめたいと思います。1つは、教員からノウハウを集めると、英語運用能力以外に重要となるポイントもいろいろと明らかにされたということです。英語運用能力だけを向上して英語で教える能力が向上するというわけではなく、それ以外のこともあるというのがよくわかりました。2つ目は、英語による授業に困っている教員は少なくないというのがわかりました。本当に困っている状況を説明してくださる教員も多かったです。大学として、組織として、英語による授業の増加を目指すのならば、個々の教員のサポートが、より一層必要になってくるのではと思います。

英語による授業に関する論点

最後に、英語による授業について考えるための論点

をいくつか紹介します。一番大きな問題は、今後予想される政策的誘導にどのように対応すべきなのかという点だと思います。英語による授業を促進するための具体的な政策がつくられるはずです。大学として、研究科として、その動きに乗るのか乗らないのかという判断をしなければならないのではと思います。

そのために考えておくことはたくさんあります。1つは、そもそもなぜ英語による授業なのかという問題です。日本の大学で日本人の教師が日本人の学生に対して英語で教えることの意味は何なのかということです。英語による授業は誰にとって意味のあるものなのか。大学の組織として意味のあることなのか。教員にとって意味のあることなのか。日本人学生にとってなのか、それとも留学生にとってなのかということです。特に現在、名古屋大学が迎え入れている留学生の多くはアジア諸国からです。そういう時に、本当に彼らが英語で学ぶ機会を欲しているかどうかというのは、調査すべきことだと思います。もう1つ、考えておいたほうがよいと思うのですが、自国語の教材で、自国語を使用言語として小学校から大学まで教育ができるということの意味を考えておくべきだと思います。1億人の人口を持つ日本は、さまざまな学問分野の翻訳を進めてきて、自国語の教材を使って自国語で教育を提供することができたということです。これをどのように評価するのかということが必要だと思います。もう1つの問題は、留学生の受け入れと英語による授業の関係をどのように整理するのかという課題です。アジア諸国からの留学生の受け入れを増やすのであれば、英語による授業の増加とどのように関係があるのかというのをきちんと整理しておく必要があるでしょう。この問題は、もしかしたら分けて考える必要があるのではないかと私は思います。

これらの根本的な問題を考えた後に、それでも英語による授業を推奨する方向に進むなら、次のような課題があると思います。1つ目は、英語教育とどのように連携を進めるのかという問題です。2つ目は、英語の教科書・資料の使用から始めるなど段階的な運用が可能かということです。これは熊本大学の事例が役に立つと思います。3つ目は、学生の授業内容の理解度の低下など、英語による授業がもたらす弊害にどのように対応するのかという問題です。4つ目は、教員採用時に、英語による授業ができることを評価の要素に加えるかどうかという問題です。5つ目は、教員に対してどのようなサポートや研修機会を提供するのかという問題です。6つ目は、学生に対してどのようなサ

ポートや学習機会を提供するののかという問題です。最後の2つの問題については、高等教育研究センターに相談していただければ、協力できるのではないかと思います。

司会者：中井先生、どうもありがとうございました。わたしは今日、中井先生のお話を伺うまでは、英語による授業というのは半分人ごとというか、75%ぐらい人ごとだったのですけれども、特に最後のところでそもそもの問題があって、英語による授業を始める前に考えておくべきことも多々あるということもありましたし、現在のわたしたちが置かれている状況やいろいろな情報をもとにして議論のためのきっかけも与えてくださったと思います。せっかくの機会ですので、是非ご質問やご意見などがありましたら中井先生、あるいは先生方同士で意見交換をしていただければと思います。どなたか何かご質問などございませんでしょうか？

Q：質問と言えるかどうかかわからないのですが、今、いろいろ考えなければいけないことを紹介していただきましたけれど、もう1つ文学部の場合、全部がそうじゃないのですが、例えば日本史であるとか日本文学であるとか、日本を研究対象にしている分野というのがあるわけです。もちろんニューフェイスのほうからはよく、そういった分野でこそ英語の授業をやれという要請があるわけですが、ニューフェイスぐらいでしたら、初歩の段階なら、短期でやってくる外国人に日本のことを英語で教えるという意味はあるかもしれないです。でも、本格的に勉強したいという学生の場合に、日本についての学問（授業）を英語でやることに意味がないわけではないと思うのですが、そこら辺もちょっと考えなければいけないことではないかという気はしているのですが。

A：その通りだと思います。専門分野によって状況は違うと思います。この冊子をつくったときにニーズがあったのは医学研究科や工学研究科です。おそらく英語をコミュニケーションの単なる手段と見なしやすい学問分野なのかもしれません。文学研究科においては言語自体が手段以上のものという前提で考えなくてはいけないと思います。日本についての学問やアジアやヨーロッパについての学問において、その授業を英語でやることを意味を考えなければならないでしょう。それを教員集団として考えるのが、おそらくFDなのではないでしょうか。ただ、日本の大学教育の独自性を海外に発信するという目的があれば、日本を研

究対象にしている分野を英語で授業を開講してほしいという要望は強まるのが予想されます。

司会者：タムラ先生。

Q：今、工学部、医学部辺りから英語による授業の実施の状況も多いし、困っている問題もあるというのですが、そういったクラスというのは基本的に出席者も日本人の学生で、講義者も日本人の先生でというクラスなのでしょうか？ それとも留学生主体ということになるのでしょうか？

A：今回意外だったのは、最も留学生が多いはずの国際開発研究科からそれほど冊子に対する依頼がなかったことです。おそらく国際開発研究科の教員はもう慣れていらっしゃるのではないかと思います。学内のいくつか授業を見学させていただいたのですが、やはり日本人の教員が日本人の学生と留学生を交えてという形で授業が行われている場合が多かったです。

Q：その場合、教育目標みたいなものは、例えば論文を英語で書くとかあるいは学会で英語で発表するか、そういうことを見込んで英語による授業とかディスカッションをするという、そういう目標なののでしょうか？ それとも、ベーシックな工学や医学の基礎的な内容を英語で学ぶということなのだろうか。

A：私も名古屋大学で実施されている英語による授業のすべての授業内容を把握していません。もし一部でもよろしければ、本日DVDを持参していますので視聴していただくと様子がわかるかもしれません。いかがでしょうか？

司会者：じゃあ、ちょっと見せていただきます。お願いします。

(ビデオ上映)

中井：いかがでしたでしょうか。雰囲気があったのではないのでしょうか。撮影する講師を選ぶときに、あまりうますぎる人を入れるとよくないのではないかと考えました。「これだったら私もやってみたい」というように思えるDVDになればと思っていました。その点では、留学生センターの高木さんの英語はうますぎたのかもしれません。

司会者：うますぎですね。ほかの方もかなりうます

ぎたので、しょうがない、ダメかなと思いました。タムラ先生のご質問が今の DVD の関係ですけれども、どうでしょう？ DVD をご覧になって、みなさんのご感想をお願いしてよろしいでしょうか。周藤先生。

Q：やっぱり英語による授業というときに、多分2つのことが漠然と混同されたかたちで受け取られているのではという気がするのです。1つは、媒体となる言語が英語だということ。つまり、日本語で普段やっている授業を英語でやるというと、われわれはいろんなFDの機会にアメリカの大学でこんな授業をやっている、ああやっているっていうのはさんざん知識としては知っているわけです。だからそういうスタイルの授業をする。当然、英語でやっている授業は、いろいろ今のもも含めて、基本的には英語圏のところに留学していて自分が受けてきた授業を再現しているという面があるのだと思うのです。だから、これは英語でやるかやらないかという純粋に言葉の問題なのか、その方法論まで含めた授業の組み立て方であるとか対話的な授業構成であるとか、そういう問題なのかということを感じて、なかなか議論できないのではという気がするのですが、どうでしょう？ つまり、今、1時間半の授業をやっていますね、専門科目講義。これを1時間半英語でやれと言われるとやっぱり相当疲れるし(笑)、あんまりやりたくないなと思うのですけれど。日本語だから適当に水増しをしながらしゃべっているからコアの部分は英語でやってもいいのかもしれないけれど。

A：どうもありがとうございます。言語だけの問題か授業の方法までに関わる問題なのかという点ですね。私は、英語による授業は、1時間半英語で話すというのは目指さないほうがよいと思います。学生がより能動的に学べるような授業方法に転換した方がよいと考えています。その方が教壇でも教員が余裕を持てると思います。

Q：つまり高等教育研究センターとしては、今やっている授業を英語に置き換えるというだけではなくて、英語力を向上させるよりも、むしろ授業の作り方を工夫したほうが英語による授業はよりやりやすくなるであろうということですね。

A：そうです。また、日本語による通常の授業についても、学生参加型の授業が増えればと思います。

Q：英語による授業だけではなくて、日本語による授業も含めて、全般の授業の向上を図りたいという。

A：そうです。今回紹介したハンドブックの中にも含まれるフレーズは、日本語の部分だけでも新任教員に

って役に立つはずですよ。ただ英語で教えるという場面があるからこそ、フレーズとかノウハウが受け入れられやすいという側面もあると思います。たとえばeラーニングを経験すると、授業のやり方がよくわかったという人が多いようです。実際にeラーニングをすると、きちんと授業をデザインしておかないとうまくいきません。eラーニングの場合と同様に、英語による授業をやってみて自分の授業を見直すということになれば私は思っております。

司会者：ナカジマ先生。

Q：韓国の大学の状況というのがあるのですが、わたし自身は自分と同じフィールドの人たちを見ていて、決して韓国の大学の先生よりも日本の大学の先生のほうが英語で劣っているとは思わないです。同等の力はあると思うのです。韓国ではもっと World Englishes として話しやすいような文化的な条件があるという印象は受けますけれども。ですから、どうしてこういうふうに韓国でのパーセンテージが高いのかというところが1つの疑問であると同時に、日本でもこれぐらいいいけるのではという気もするのですが、いかがでしょうか？

A：どうもありがとうございます。韓国が日本と比較して英語による授業の比率が高いのには国の規模が関係すると思います。日本の人口は約1億人です。これくらいの市場規模を持つと、教育のみならず、さまざまな文化を翻訳して日本語化することがやりやすかったのではないかと思います。韓国の人口は日本のほぼ半分ですから、教科書や教材を韓国語化するには日本ほど簡単ではないでしょう。そのため、英語による授業を増やしていくことが韓国の国策の中の1つに位置づけられているのだと思います。一方、日本の大学でも海外の大学での経験をもつ教員は増えていきますので、これから英語による授業を増加させることは難しくなるでしょう。

司会者：タキガワ先生。

Q：留学生以外の名古屋大学の学生で英語の授業を受けて、おもしろい、よくわかる、そういう調査はされたのでしょうか？ 教師の側はそれでいいのですが、学生は、おそらくわたしの勘では、わからない、ついていけない、と思います。

A：国内で最も授業の英語化が進んでいる国際基督教大学でさえも、英語による授業についていけない学生はいるという報告を聞いたことがあります。英語が得意な学生が入学している大学でもそのような状況です。名古屋大学でもついていけない学生は少なく

ないと思います。ただ、名古屋大学の学生を対象にインタビューをすると、数式が中心となる分野の場合はそれほど困らないと言う意見もありました。

司会者：ほかに何かございませんでしょうか？ わたしからちょっとよろしいでしょうか？ 国策レベルからしますと、今後少子化で大学生が減っていくので、大学の存続を図るためには留学生を増やしていくしかないというそういう経済的なものも含めて、英語による授業は大学ランキングを上げるためにも必要なのかもしれませんが、教育の現場からいいますと、教育の質を英語によって維持するというのはなかなか大変なことで、それは教員側の問題だけじゃないのですが、その辺りをどんな感じで今後すり合わせていったらいいのか。中井先生はどうですか？

A：私はこの問題は時間が多少かかると思います。高校卒業までにきちんと英語によるコミュニケーション能力を身につけてくれば、大学でも英語による授業についても質を下げずにできるという人は少なくなります。それはもっともだと私も思います。ただ、高校までの教育もコミュニケーションできる英語を目標にしているので、学生の英語力はよくなってくるでしょう。そういう時期が思ったよりも早くやってくるのではないかと考えています。

司会者：ほかに何かありませんでしょうか？ ササキ先生。

Q：わたしは京都大学が参考になると思うのですが、議論のためのいくつかの論点、その1、何のためにやるのかというのが、やっぱりよくわからないのです。ターゲットがよくわからないし、特に文学部は先生がおっしゃられたように一番多文化的なことを多元的にやりますから、やっぱり英語帝国主義に対しては反発も強いと思います。それから、日本語研究もそうだし日本語でないのを翻訳できない場合、そういう専門的なことを英語でやろうとしたら、教養レベルの話であればわかるのですが、トレーニングをするのだったらむしろ、プレゼンテーションの練習とか、学会発表のためのノウハウとか、学会に英文で投稿するときの何か、そっちを訓練すればすむだけの話だという気もするので、15コマなら15コマ英語でやることにどのぐらいの意味があるか、やっぱりよくわからない。だから全学的にそういう政策基準があるとしても、学部ごとの多様化というのは確保してほしいと思うのです。その辺の流れはどうなのでしょう？

A：一律に名古屋大学のどの部局でも30%の授業を英語化するというのは現実的ではないと思います

し、名古屋大学の執行部もそこまでは考えていないでしょう。この問題は次の中期目標・中期計画を策定する中できちんと議論すべき課題です。そもそも文学研究科に英語による授業を開講するという計画があったのは、現行の全学の中期目標・中期計画に英語による授業の増加の項目が書かれていたからだと思います。ただ、これまで名古屋大学は日本の他大学と比較しても留学生の受け入れも多く、国際化の進んだ大学と見られています。そのため、国が推進する国際化事業には、これからも手を挙げるのではないのでしょうか。そのためにも研究科の中で、また大学の中できちんと議論すべきだと思います。その時に、英語による授業の定義が大事になります。英語の教科書を使用するが日本語で教える授業も含めるのなら、多くの部局が賛同できるのではないのでしょうか。そのような弾力的かつ段階的な運用が必要だと思います。

Q：今、オーストラリアの先生がまさにアカデミックな発表の練習みたいな授業をやっていて、その質疑応答をやっているようなのです。あとは英語の授業をやるよりは、本を出すとかのほうが大事な気がしますけれど。

A：英語による研究発表や英語による出版もこれから一層求められるでしょう。学生にも求められるようです。学生向けに最終的には論文を英語で書くことを目標にした授業が大阪大学などで実施されています。英語による研究発表や英語による出版も続けると、英語による授業にも入りやすくなるのではと思います。英語による研究発表や出版の方を第一の目標にするということでも私はよいと思います。

Q：ちょっと今のこととの関連なのですが、実際、今、中井先生から指摘があったように、中期計画になぜ入っているかという、全学で入っているからですが（笑）、今までどういうことをやってきたかというのを紹介いただきましたので、これを見ると一応やっているような感じではありますが、あまり大きな声では言えないですけども、実は何もやっていなかったというのが実際のところで（笑）、今度新しい計画を立てなければいけないわけですが、全学のあれがあるので全くやらないというわけには行かないと思うのです。ただ、一方で文学部の場合留学生が多くて、実際、中国、韓国が多くて、日本語はよくできるけど英語はダメだという学生もたくさんいるわけですので、そういった状況でどうしたらいいのかというのは、今度計画立てるときは、やらないとは言えないですけども、英語の授業をどんどん増やしていくというので

なければ代わりに何ができるのかということを真剣に考えないといけないと思いました。

A: みなさんへの意識調査のところでわかりましたように、英語で書かれた教材、教科書を使用している方というのはかなりいらっしゃいました。使用言語を英語にするという目標を立てると、ハードルは高いかもしれません。しかし、授業の中に英語の要素を加えていくという目標でしたら、受け入れられるかもしれません。たしか学内でも授業の中に何でもいから英語の要素を入れるという目標を立てている部局もありました。現実にはできる目標を立てないと評価もありますので後で苦しくなると思います。

司会者: 困ったことに全学の中期目標に英語の授業を増やすというかなりベタな目標を入れてしまったので、今度はやはり書き方をかなり気をつけて、留学生

のニーズを調査してそれに対応するようにするとか、それぐらいぼかした計画のほうがいいのかもかもしれませんね。あと、何をもって英語の授業といえるのかというのを中井先生がご紹介くださった熊本大学ですけど、いろいろこれから議論が発展しそうな雰囲気ではあるのですが、2時半までに終えないといけない。次に大学院の説明会を開催するので、今2時半ちょっと過ぎておりますので、今日は今後のさまざまな議論の企画をつくっていただいたということで、この辺りで終わりたいと思います。今日のご聴講いただきましてありがとうございました。先生、どうもありがとうございました。(拍手)

中井: さまざまなご意見をいただけて、ありがとうございました。私もいろいろ考える機会になりました。今日はどうもありがとうございました。